



がんの漢方治療②

修琴堂大塚医院 渡辺 賢治

前号で書いた通り、がんのあらゆるステージで漢方治療は役に立ちます。前号では免疫を高める漢方治療について述べましたが、今回は術後の回復補助、抗がん剤の副作用軽減目的の漢方治療について書こうと思います。

手術前から 飲み始めるのが有効

江戸時代、記録に残る範囲において、世界で初めて全身麻酔の手術をしたのは紀伊国那賀郡名手莊西野山村（現和歌山県紀の川市西野山）の医師、華岡青洲です。これはマサチューセッツ総合病院におけるジェチルエーテルによる全身麻酔手術に先駆けること42年の快挙でした。華岡青洲は蘭学の外科術を学ぶ前に、

漢方を当時の大家、吉益南涯よしますなんがに学びました。全身麻酔もチヨウセンアサガオヤトリカプトなどの生薬を使つた通仙散で、全身麻酔をかけ、乳がんの手術を行なつたのです。まさに漢蘭両医術を駆使して世界初の全身麻酔の手術に成功しました。

華岡青洲は術後の回復を早めるため、手術の前後に漢方薬を駆使しました。キズ薬の軟膏、紫雲膏しうんこうは今でも使われるキズや火傷の特効薬的軟膏です。

この華岡流の漢方薬の使い方は今でも正しいことが分かっています。手術後に感染症を起こすのは、術直後でなく、術後7〜10日くらいです。術直後はサイトカインが沢山放出され、免疫的に強まる結果、感染を起こしにくくなります。その反動が来

て、術後7日くらいで免疫が下がります。この時期に感染症が起こりやすくなります。

この術後の免疫が下がるのを予防するためには、術直後のサイトカイン産生が過剰になるのを抑える必要があります。人間のカラダはバランスが取れているので、過剰になると必ず抑える力が働くのです。術前に飲んでいただくのは十全大補湯じゅうぜんたいほとうという漢方薬です。免疫のバランスを取り、術後の免疫低下を抑えて感染症を予防します。

術後の傷の治りを早めるために使うのも十全大補湯です。術後傷がいつまでも塞がらないとか、局所の感染症で肉が盛り上がりつけない、などの患者さんに、よく十全大補湯を処方します。つい先日にも糖尿病を患っている患者さま

んが、火傷の後、皮膚潰瘍を起こして半年以上傷が塞がらない状態で来院されました。十全大補湯を処方したところ、順調に肉芽にくけができて傷が塞がりました。

他の疾患で受診継続している人が、手術をすることになった場合、それまでの漢方薬を一時中止して、術前7日、術後2〜4週間は十全大補湯にします。大きな手術が決まったら、漢方薬を術前から飲みいただくことをお勧め致します。

抗がん剤の副作用軽減

がん治療における漢方治療で、近年注目されているのが、抗がん剤の副作用軽減目的の漢方治療です。

抗がん剤は日進月歩であり、がん細胞を直接攻撃する細胞障害型の抗がん



わたなべ けんじ
渡辺賢治

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所（現北里大学）東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学特別招聘教授、慶應義塾大学医学部漢方医学センター客員教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医学会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂（2019年）に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学 同病異治の哲学』（講談社学術文庫）、『未病図鑑』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『漢方で感染症からカラダを守る』（ブックマン社）など。



渡辺賢治先生の近著「未病図鑑」

剤のほか、がん細胞の増殖機構をピンポイントで阻害する分子標的薬、がんを増殖させるホルモンを制御するホルモン剤、免疫チェックポイント阻害剤に代表される免疫賦活剤など、多岐にわたっています。今までは臓器別にがんというものを捉えていましたが、最近の動向は、違う臓器のがんでも、遺伝子異常が同じであれば、共通の抗がん剤を用いる、というように変わってきています。

療を思い出してください。代表的な副作用に対する漢方治療をいくつか挙げます。骨髄抑制で白血球が減少する場合には、十全大補湯や加味帰脾湯を使います。骨髄造血幹細胞に働いて白血球だけでなく、赤血球や血小板が増やすことが示されています。白血球の数は感染防御の点において重要ですが、がんに対抗するためには、リンパ球が重要です。リンパ球は栄養障害、ストレスなどで低下してまいりますので、栄養をしっかりと摂取してストレスを避ける生活を心がけてください。

手足のしびれ（末梢神経障害）もよくある副作用です。末梢神経障害は手足の先から始まり、徐々に範囲を拡げていきます。抗がん剤の種類によって、障害を受ける部位が異なるので、症状の出方や回復の速度も異なります。漢方薬では附子を含有する牛車腎気丸や真武湯を使います。痛みセンサーであり、温度センサーであるTRPチャンネルに働いて痛みの反応を抑制することが知られています。こちらも抗がん剤の投与開始前から漢方を飲み始めることをお勧めします。抗がん剤が終了して、重い神経障害が残った場合、回復には時間がかかります。薄皮を剥ぐようにしか改善しませんが、根気よく漢方治療を継続してください。

こうした抗がん剤は、投与中は手足を冷やして副作用を軽減します。それ以外は温めて血流を良くすることで、しびれの程度が改善します。ぬるめのお風呂に少し長めにつかるとよいでしょう。副作用を減らすことで、治療効果も弱まるのではないかと心配される方がいらつしやいますが、その心配はご無用です。抗がん剤と併用する漢方治療の目的は、副作用を抑えて、予定通りがん治療を完遂することにあります。また、副作用の出方には個人差があります。医師からいろいろと副作用の説明はありますが、全部出るとは限りません。まずは治療に入つて、漢方で副作用を軽減しながら最大の効果が出るようにしましょう。